

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成27年は15万2千トンとなりました。

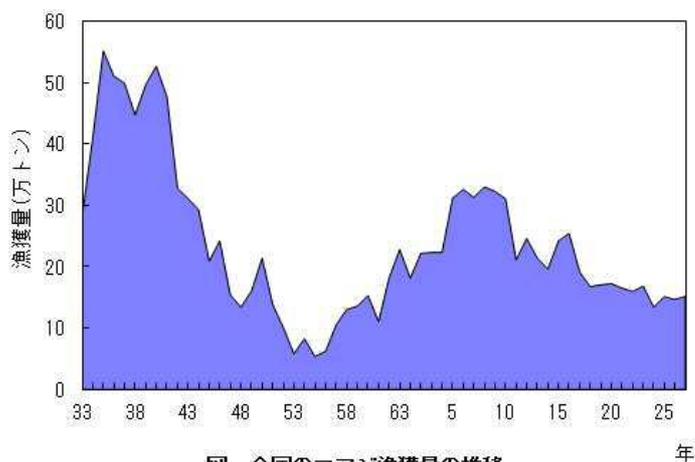


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の平成29年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖、枕崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ仔・豆（1歳魚：平成28年生まれ）主体に、期全体で695トンの水揚げで、前年の348%及び平年の220%となりました。

3. 県内の平成29年7～9月期の見とおし

漁獲の主体はマアジ仔・豆（0歳魚：平成29年生まれ）で、マアジ小（1歳魚：平成28年生まれ）も混じるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターン等から予測しました。

前期に0歳魚（平成29年生まれ）の前年・平年を大きく上回る漁獲があったことや、対馬暖流系群の資源動向は増加傾向にあるという平成28年度の資源評価結果を踏まえ、来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

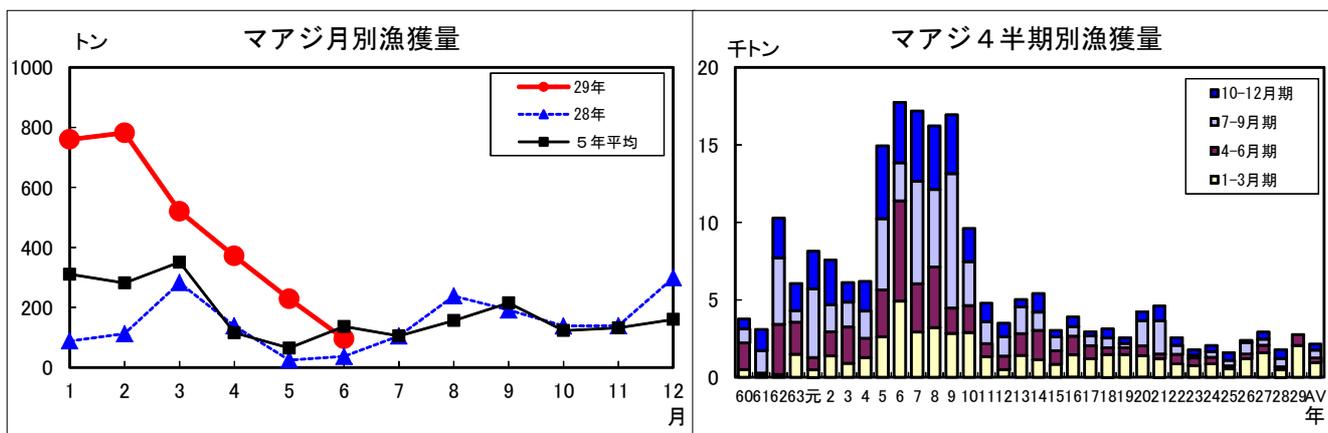


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成24～28年）の平均値(AV)、平成29年6月28日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成27年は前年を上回る55万7千トンとなりました。

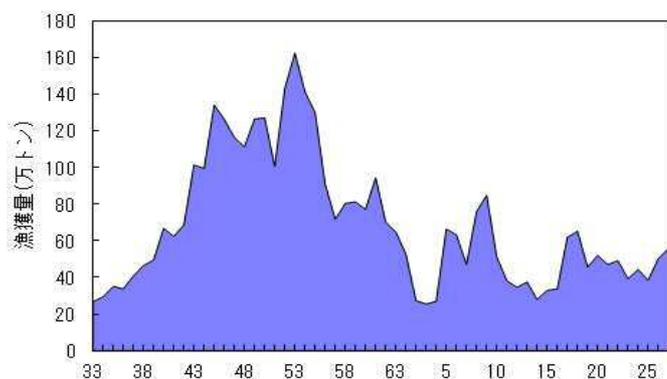


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の平成29年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖、屋久島南、内之浦沖、種子島南で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、ゴマサバ中（2, 3歳魚：平成27, 26年生まれ）主体に期全体で5,491トンの水揚げで、前年の145%及び平年の120%となりました。

また、4月には薩南海域でマサバ中小（2, 3歳魚：平成27, 26年生まれ）主体にマサバのまとまった水揚げが見られました。

3. 県内の平成29年7～9月期の見とおし

漁獲の主体はゴマサバ小（0歳魚：平成29年生まれ）および中（2, 3歳魚：平成27, 26年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年・平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターン等から予測しました。

例年2, 3歳魚が主体となりますが、今年は0歳魚の漁獲への加入が早く、小および中銘柄が主体となると考えられます。

また、前期のゴマサバ中銘柄は平年並に推移しており、4月にまとまった水揚げのあったマサバは5月以降低調に推移していることから、来遊量は前年・平年並であると考えられます。

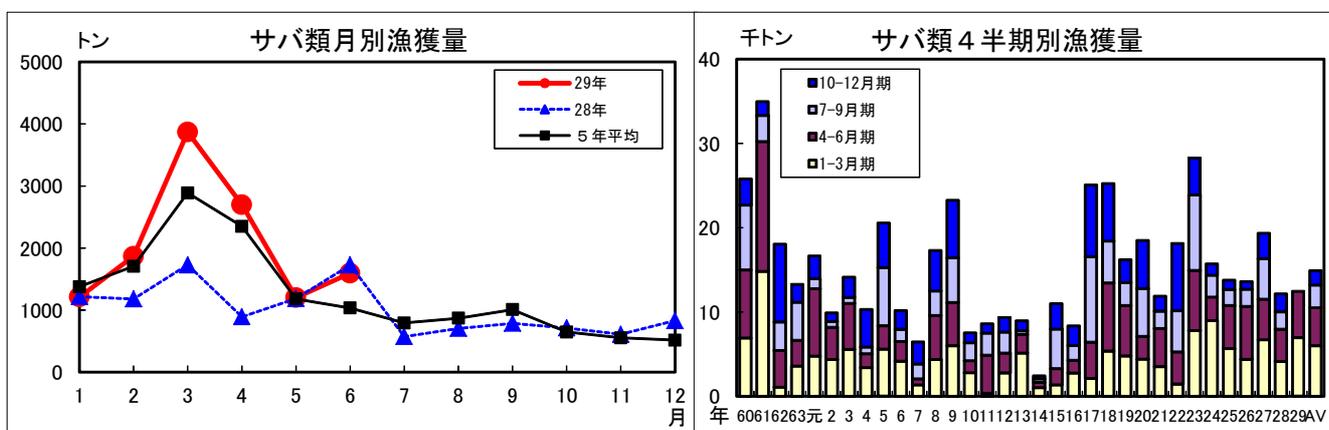


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成24～28年）の平均値(AV)、平成29年6月28日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成27年には34万トンとなりました。

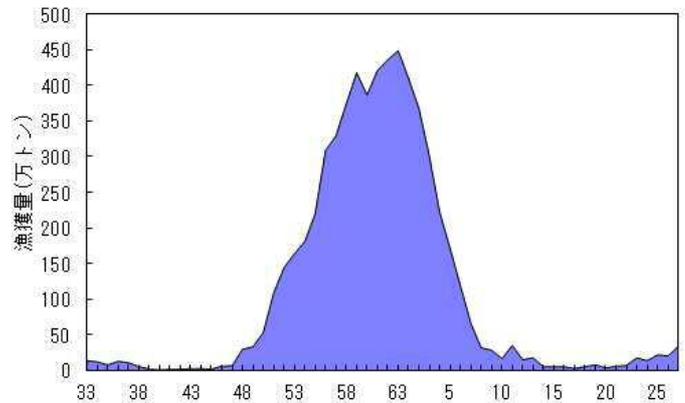


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の平成29年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、長島（内海）、甌島周辺、牛深沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、枕崎沖、開間沖、馬毛で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小～中羽(0歳魚：平成29年生まれ)主体に462トンの水揚げで前年の78%、平年の62%でした。

北薩海域の棒受網は、69トンの水揚げで前年の58%、平年の53%でした。

3. 県内の平成29年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽～中羽(0歳魚：平成29年生まれ)でしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚(平成29年生まれ)は、6月にまとまった水揚げがあったものの、平年の水揚げには達していないため、来遊量は好調だった前年・平年は下回ると考えられます。

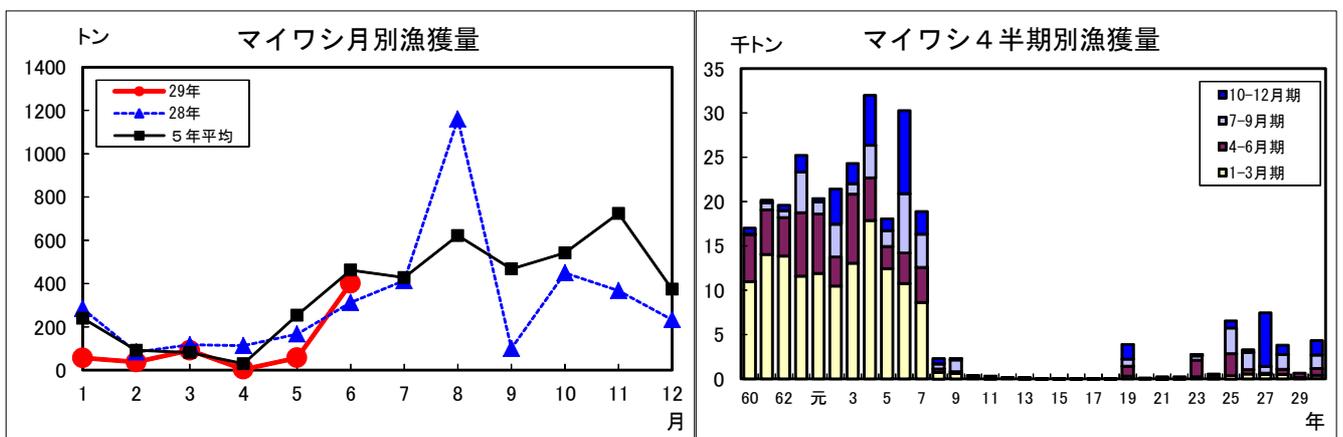


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成24～28年)の平均値(AV)、平成29年6月28日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成27年は9万7千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、高い水準を維持しています。

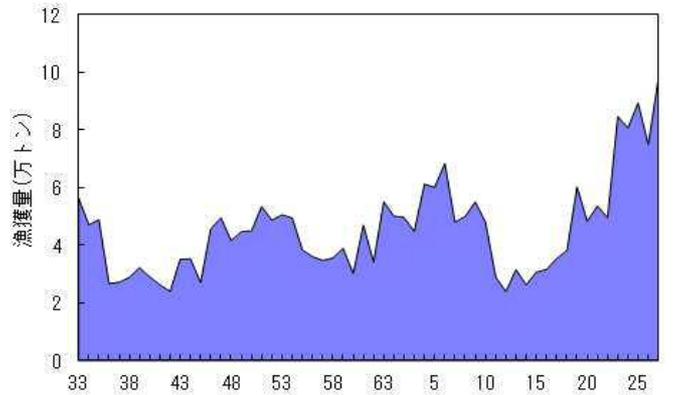


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成29年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺、天草西沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、内之浦沖、竹島、志布志沖で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小羽（0歳魚：平成29年生まれ）、大羽（1歳魚：平成28年生まれ）主体に801トンの水揚げで前年の57%、平年の59%でした。

北薩海域の棒受網では、93トンの水揚げで前年の47%、平年の65%でした。

3. 県内の平成29年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、小～中羽（0歳魚：平成29年生まれ）でしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

例年0歳魚が漁獲の主体となっており、前期まで漁獲された1歳魚（平成28年生まれ）の水揚げは長く続かないと考えられ、前期の漁況は低調に推移していることから、来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

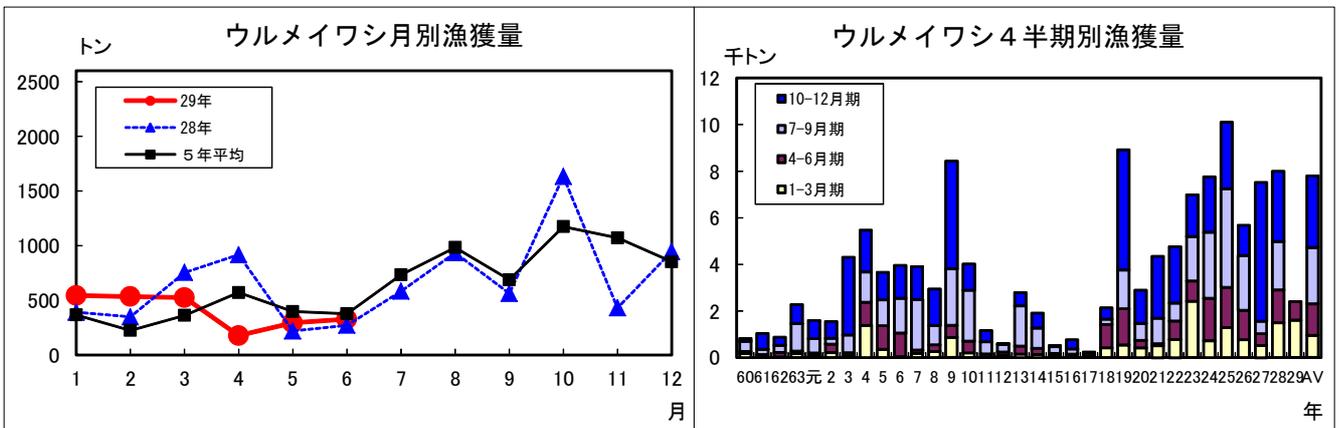


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成24～28年）の平均値(AV)、平成29年6月28日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成27年は16万9千トンとなりました。

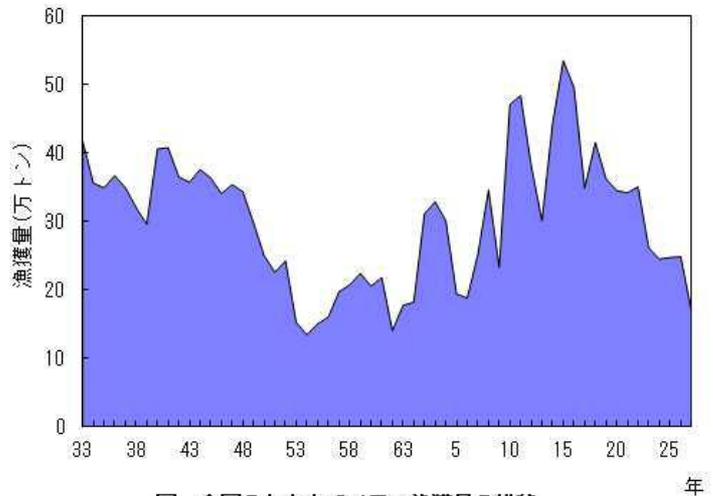


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成 29 年 4～6 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、長島（内海）、甌島周辺、天草西沖に漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、枕崎沖、開聞沖、馬毛に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、小～中羽（平成 28 年生まれ）主体に 1,629 トンの水揚げで、前年の 104%，平年の 149% でした。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島沖、長島（内海）で漁場が形成され、350 トンの水揚げで、前年の 112%，平年の 105% でした。

3. 県内の平成 29 年 7～9 月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽～大羽（平成 28 年生まれ）でしょう。

来遊量は前年・平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

来遊量は近年好調に推移しており、前期の漁況も好調に推移しているものの、今年春のシラス漁況から例年漁獲される小羽の加入が遅れると考えられるため、前年・平年並と考えられます。

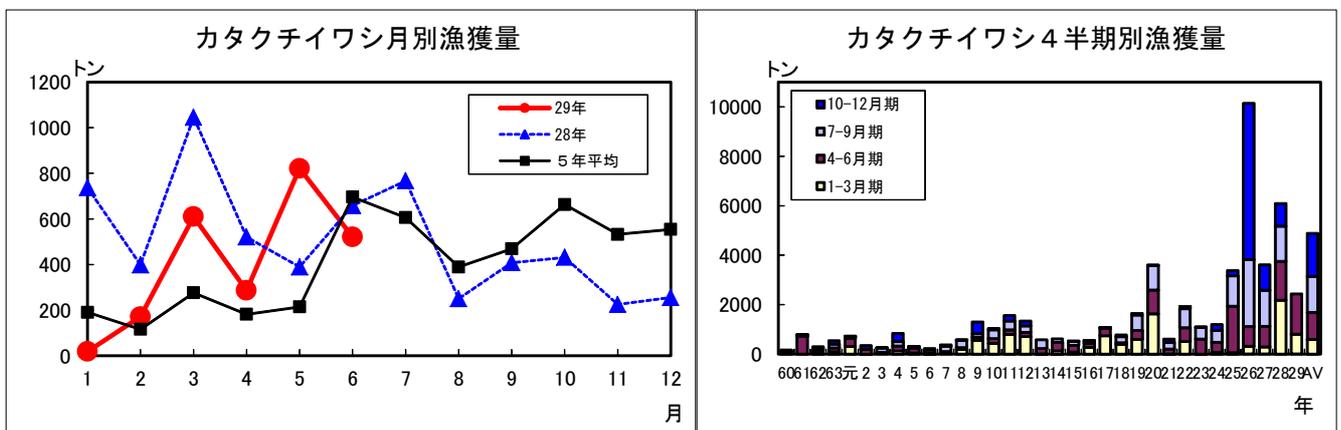


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 24～28 年）の平均値(AV)、平成 29 年 6 月 28 日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後、平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、平成 28 年は 1,497 トンとなりました。

志布志湾海域では、平成 19 年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し、平成 28 年は 1,496 トンとなりました。

2. 平成 29 年春漁（3～5 月）の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス、カエリ主体に 743 トンの水揚げで、前年の 121 %、平年の 106 %でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に 89 トンの水揚げで、前年の 42 %、平年の 25 %でした。

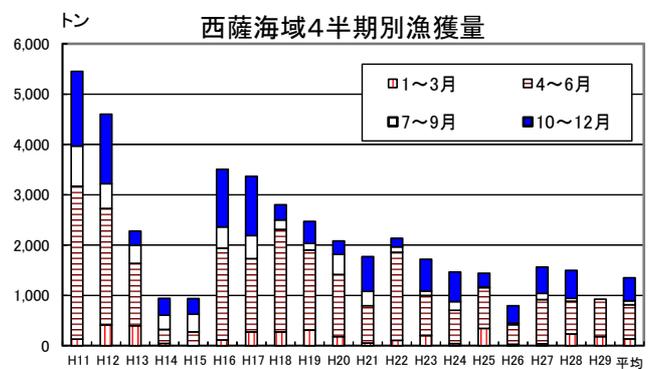
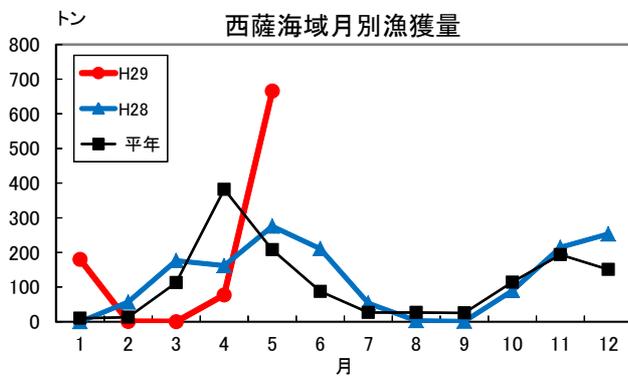


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4 漁協計)

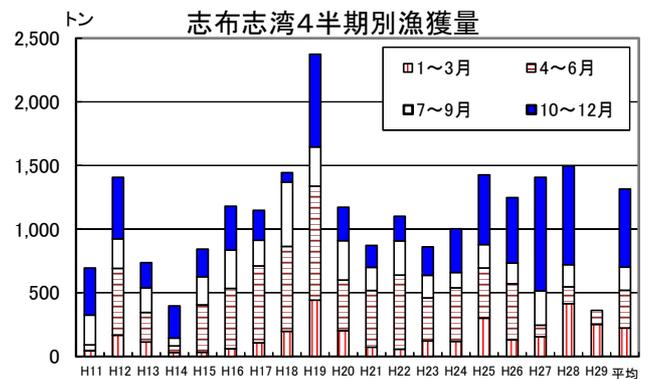
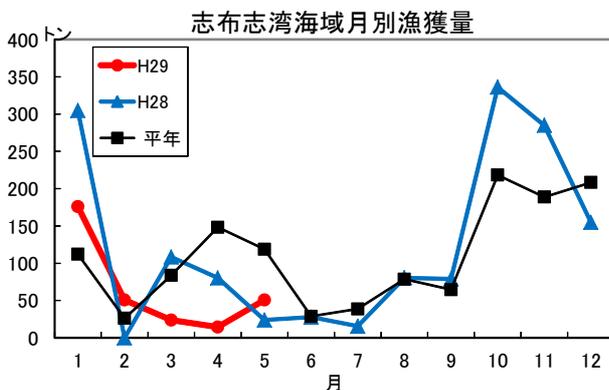


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2 漁協計)

※平年値は過去 5 年（平成 24～28 年）の平均値(AV)、平成 29 年 5 月 31 日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

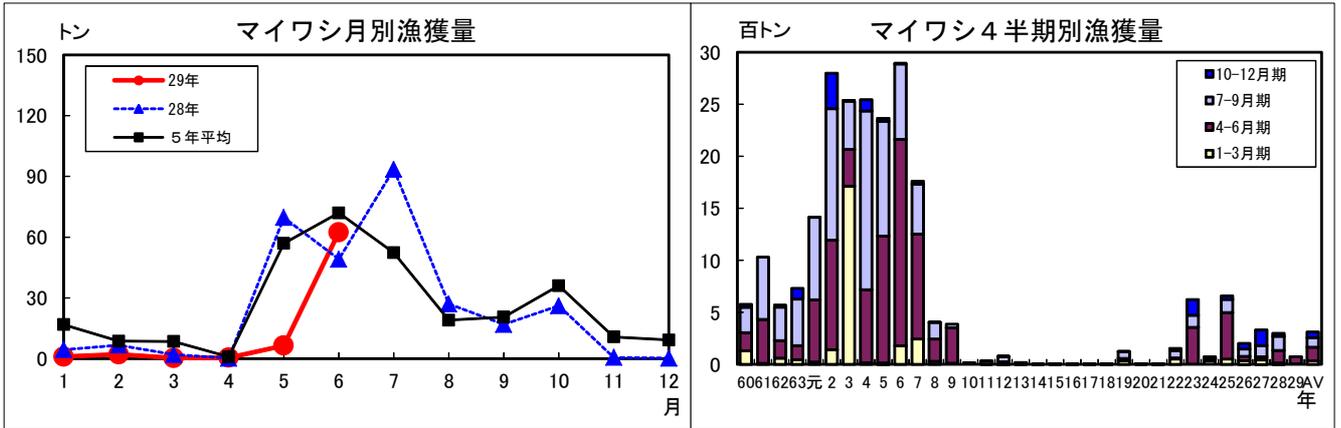


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

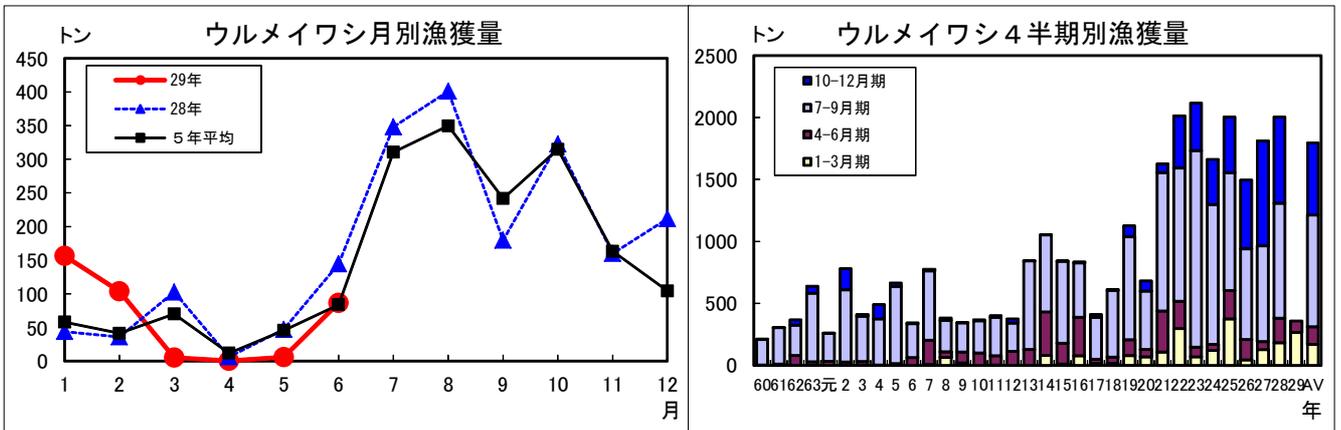


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

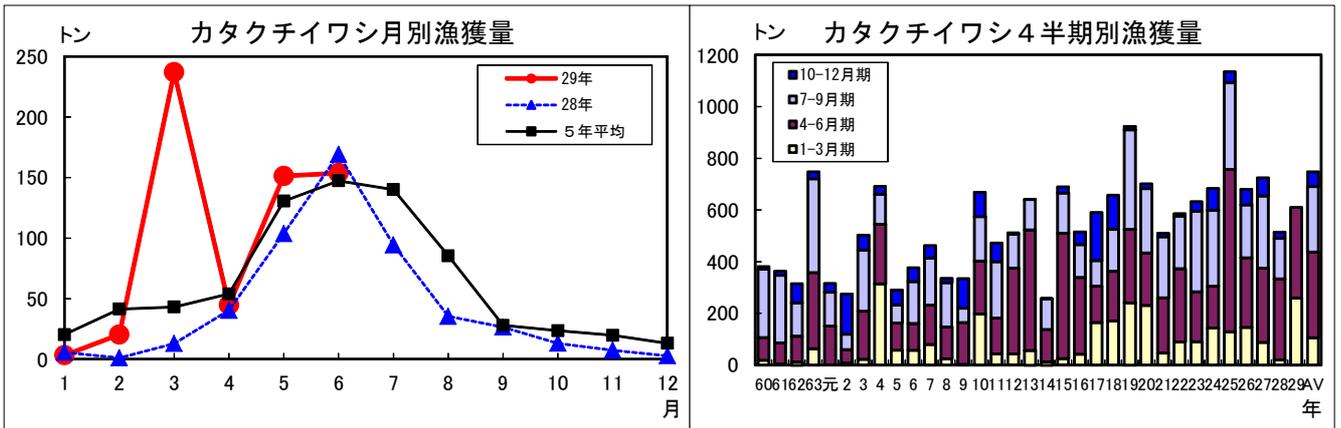


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年(平成24~28年)の平均値(AV),平成29年6月28日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成 29 年 4～6 月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成 2 年の 21,700 トンをピークに急減し，平成 6 年以降は，1,500 トンから 5,000 トンの間での推移しており，平成 28 年は 4,943 トンとなりました。

4 港計のまき網では，臥蛇島，種子島南でクサヤモロ小，クサヤモロ中小主体の漁場が形成されました。期全体で 603 トンの水揚げで，前年の 149 % 及び平年の 191 % でした。

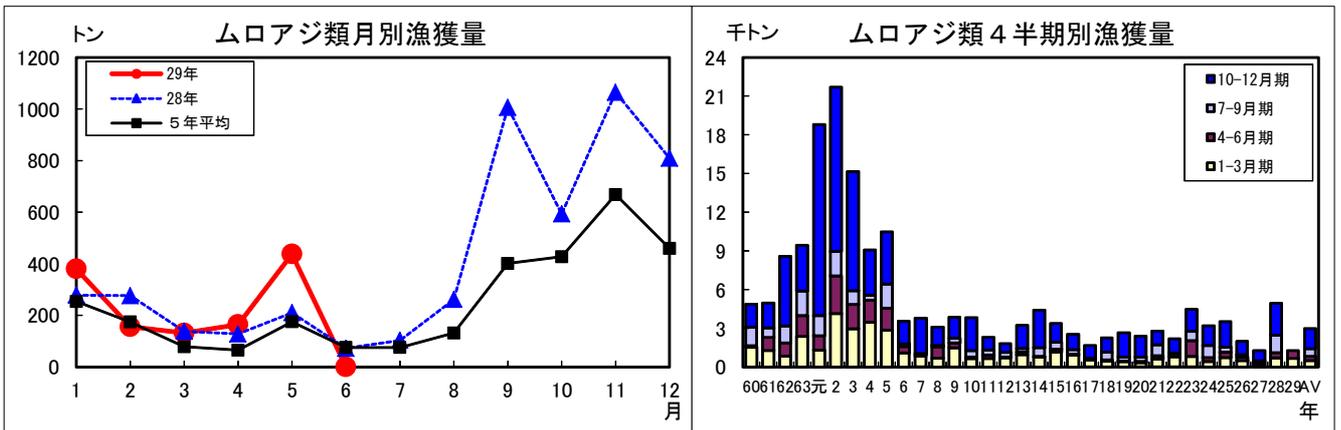


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去 5 年（平成 24～28 年）の平均値(AV)，平成 29 年 6 月 28 日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成 29 年 4～6 月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の 5,300 トンをピークに一旦減少し，平成 7 年に 4,400 トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成 20 年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが，平成 28 年は 2,442 トンと，平成 12 年以降最も多く漁獲されました。

4 港計のまき網では，屋久島南，種子島北で中小，小，中主体の漁場が形成されました。期全体で 557 トンの水揚げで，前年の 70 % 及び平年の 154 % でした。

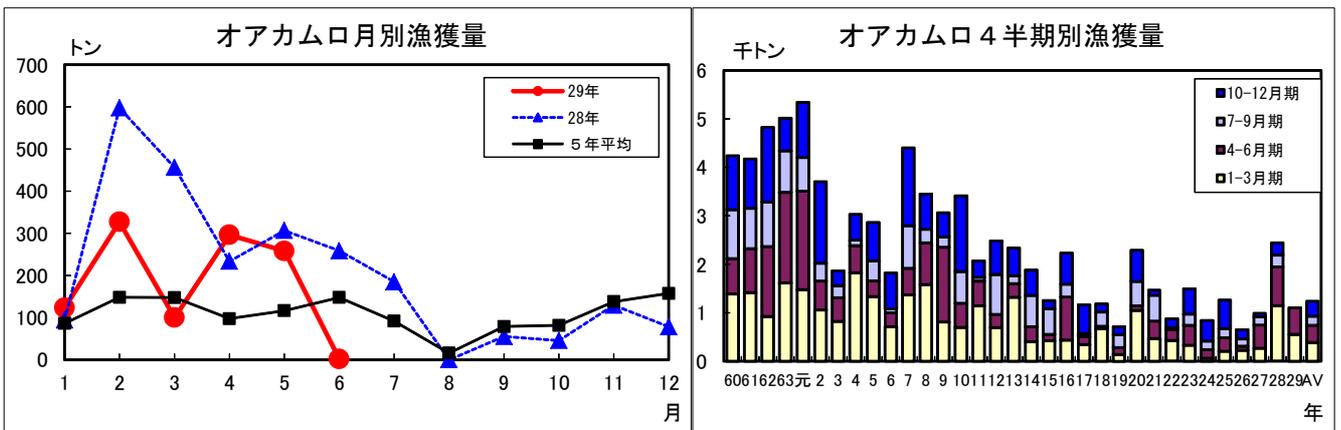


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去 5 年（平成 24～28 年）の平均値(AV)，平成 29 年 6 月 28 日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成29年4～6月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、平成28年は323トンとなりました。

4港計のまき網では、串木野沖、長島（内海）で小、豆主体の漁場が形成されました。期全体で78トンの水揚げで、前年の325%及び平年の105%でした。

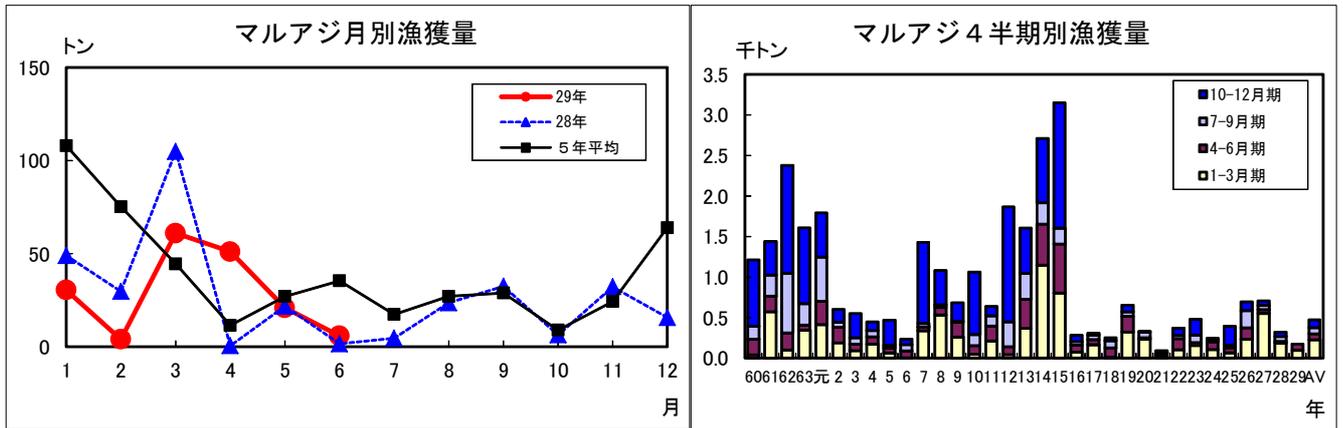


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成24～28年）の平均値(AV)、平成29年6月28日までの水揚げ量を使用